

感覚障害学生とのキャンパス内交流に対する 健常学生の自己効力に関する研究

河内 清彦¹ 四日市 章¹

THE SELF-EFFICACY EXPECTATIONS OF NON-DISABLED STUDENTS ABOUT INTERACTIONS WITH STUDENTS WITH SENSORY IMPAIRMENTS IN COLLEGE CONTEXT

Kiyohiko KAWAUCHI AND Akira YOKKAICHI

This study investigated the self-efficacy expectations of non-disabled students about interaction in the college context with students with disabilities. Three hundred and one non-disabled college students completed the 26-item revision of College Interaction Self-Efficacy Questionnaire (CISEQ: Fichten et al., 1987) with reference to interaction with a student who is visually impaired, or hearing impaired. The scale yields the following two scores: self-efficacy Level and Strength. Factor analytic procedures yielded two factors, named Friendship and Self-Assertion, from the Level scores, and one other factor, named Confident Rating, from the Strength scores. The factors obtained in the visually impaired condition were similar to those obtained in the hearing impairment condition. In the analyses of the relationships of the CISEQ factor scores to respondent demographic and experiential variables, a degree of interest in people with disabilities was significantly related to the Friendship factor; a respondent self-esteem was positively related to all factors; female respondents and respondents with people suffering disabilities in their families responded positively on the Friendship and Confident Rating factors, while responding negatively on the Self-Assertion factor.

Key words: self-efficacy expectations, non-disabled college students, interaction in the college context, a student visually impaired, a student with hearing impaired.

最近わが国でも障害者を受け入れる一般大学の数が増加してきている(わかこま自立生活情報室, 1995)。入学した障害学生が充実した大学生活を送るには、施設・設備の充実に加え、周囲の人々、とりわけ健常学生との人間関係は重要である(障害学生問題研究会, 1990)。しかし障害学生と交流することに対する健常学生の意識は否定的である(Fichten, 1986; Fichten, Robillard, Tagalakos & Amsel, 1991; 河内, 1990a, 1990b)。このため障害学生は、

大学生活に適応するのが難しく、孤立しやすい(Penn & Dudley, 1980)。

健常学生が障害学生との交わりを回避する原因には、適切な行動に関する知識不足、不安、交流場面で効果的な行動がとれないのではないかという認知予期、相手の感情や態度に対する不正確な評価など様々なものが考えられる(Curran & Wessberg, 1981)。なかでも障害学生との交流では、障害学生の反応に対する健常学生の認知や感情の要因が特に重要である(Fichten & Bourdon, 1986)。しかし健常学生の場合、交流場面で課題をうまく遂行できるか否かの認知予期(自己効力)は、健

¹ 筑波大学心身障害学系 (Institute of Special Education, University of Tsukuba)

常者に対するよりも身体障害者に対する方が弱いことを Fichten (1986) は見いだした。

自己効力には、特定の場面で遂行される特定の行動に影響するものと、特定の場面や行動に依存せず、より長期的かつ一般的な日常行動に影響するものがある (Bandura, 1977; 坂野・東條, 1993)。障害学生との交流では、特殊性の高い場面で通常とは異なる行動が健常学生に要求される可能性も高く (Eisler, Hersen, Miller & Blanchard, 1975), 前者のレベルでの認知構造研究が肝要である。この場合問題とされるのは、特定の行動遂行ができると個人の感じる対処もしくは解決可能性の「水準」と、各行動をどのくらい確実に遂行できるかという確信の「強度」とである (Bandura, 1977; 坂野・東條, 1993)。このため、車椅子使用の学生と視覚障害の学生を交流対象に、健常学生の自己効力の「水準」と「強度」を測定する、“キャンパス内相互交流自己効力質問紙 (CISEQ)” が開発された (Fichten, Bourdon, Amsel & Fox, 1987)。この尺度は、尺度構成に必要な因子的妥当性の検討がなされておらず、また「水準」得点を二分して、「強度」得点を求めるなど、尺度の妥当性と信頼性には問題がある。したがって、この分野の研究をするためには、まず測定尺度の開発を念頭においた基礎的研究が必要である。

ところで、身体障害者との交流に対する認知的・感情的反応に影響する要因に関する研究をレビューした Cloerkes (1979) および河内 (1990a) によると、接触の効果は最も重要なものの1つであり、家族や友人の中に障害者のいる者は交流することに当惑を感じる者が少ないのに対し、単に障害を持つ人が親戚にいたり、街中で障害者と話をしたことがあるとか、マスメディアなどでしか障害者を知らないとかいう者は交流に強い緊張を感じると結論している。このことから、接触の質が交流することに緊張を感じるか否かの認知予期 (自己効力) にも影響することが推測される。また、このような緊張感は、心身障害学を専攻する大学生にも見られており (河内, 1990a), 一般的な専門知識を得るだけでは特定の場面に対する自己効力を高めることは難しいことが推測される。しかし, Gething & Wheeler (1992) は、障害固有の正確な知識を持つ者は、障害者との交流に不快を感じないことを見いだしている。したがって障害固有の知識は、障害者との交流への自己効力にも影響することが推測される。それと同時に、交流への反応は、交流対象の障害種別にも影響しており (Stovall & Sedlacek, 1983; Whiteman & Lukoff, 1965 など), 障害者との交流に対する自己効力を調査する場合

には、交流対象の障害種別にも注意を向けることが必要である。

また交流対象については、障害固有の知識だけでなく、関心の程度も大きく影響することが総理府の世論調査などから明らかとなっている (河内, 1994)。すなわち、障害者に対する関心が強い人は障害者を援助することが多かった。このことは、障害者への関心の強い者は交流することへの自己効力も強いことを示唆している。

一方、人格特性のような一般的な要因との関連についての広範囲の研究をレビューした結果を見ると (Cloerkes, 1981; 河内, 1990a; Yunker & Block, 1986), 障害者に対する肯定的な反応と関連する要因の数は非常に少ない。しかしそのほとんどが、精神的な安定や強さを示すもので (河内, 1990a), なかでも自尊心は障害者と交流することと有意な関連傾向があり (Fichten et al., 1987; Garske & Thomas, 1990), 一般的な要因の効果を検討する上で自尊心の要因は重要と考えられる。また一般的な要因としては性別の効果についても多くの研究がなされているが (河内, 1990a; Yunker & Block, 1986), その効果は現在では減少してきている。しかしこれまでの研究は、1次元的な尺度を用いたものがほとんどで、多次元的な分析結果によると女子学生の方が受容的である因子 (例えば、親密さ) が抽出されている (Kang & Masoodi, 1977; 河内, 1990a, 1990b)。さらに女子学生は大学で障害者を支援することに寛容であり (Gannon & MacLean, 1995, 1996), 障害者との交流に対する自己効力も女子学生の方が強いことが推察される。

そこで、本研究では同じ感覚障害でもコミュニケーション手段が大きく異なる視覚障害学生と聴覚障害学生とを交流対象とし、(1)感覚障害学生との交流に対する健常学生の自己効力の認知構造を障害別に探究し、(2)障害相互の関連を考察し、(3)認知構造と関連する要因 (すなわち、性別、接触経験、専門知識、関心度、自尊心) の影響について検討する。

方 法

1. 調査対象および調査時期

障害者問題に何等かの関心を持つ学生を調査対象とするため、東京近郊のT大学で1995年2月と9月に行われた手話と点字の第1回授業に出席した大学生301名を選んだ。その内訳は点字が142名、手話が159名で、1年生が176名、2年生が87名、3年生が36名で、不明が2名であった。また、所属する学部は、教育学部が119名、文学部が26名、社会学部が21名、理学部が76

名,工学部が43名,その他16名であった。性別は,女子が194名,男子が106名,不明が1名で,その平均年齢は20.16歳であった。なお,調査対象者に障害を持つものはいなかった。

2. 調査質問紙

感覚障害学生とキャンパス内で交流することに対する健全学生の自己効力を測定する項目を作成するため,Fichten et al. (1987) が作成した CISEQ を翻訳してその内容を検討した。この尺度は視覚障害と車椅子使用の大学生を交流対象として大学キャンパス内での仮想的な相互作用場面を表わした40項目から構成されている。そこで本研究では,まず視覚障害学生を交流対象とした項目を日本語に翻訳した。次に,聴覚障害学生を交流対象とする項目を作成するため,上記40項目の内容が聴覚障害学生に当てはまるように字句や交流場面の修正を筆者等が行った。これらの項目の内容的妥当性を検討するため,障害心理学を担当している大学教官2名と心身障害学専攻の大学生8名(視覚障害学生1名を含む)に意見を求めた。それに基づいて,わが国の実情にあうように項目を加筆修正した結果,両障害ともそれぞれ26項目を採用した(TABLE 1)。交流対象の説明としては,あなたがあまりよく知らない,同性の大学生で,①「目が全く見えず,文字の読み書きは点字を,また歩く時は白杖を使う相手」(視覚障害者)および,②「耳が聞こえず,音声でのコミュニケーションがとりにくいため,主に手話や筆談を使う相手」(聴覚障害者)を用いた。自己効力の「水準」と「強度」の評定を区別するため,各項目に対し2種類の教示,すなわち①心地良さ(水準):各行動を遂行する際にあなたの感じる気持ちを,気分が非常によい(6)から,気分が非常に良くない(1)の6段階で評定してください。②確信度(強度):各行動を遂行することに対して,あなたの感じる確信の程度を,非常に確信が持てる(6)から,全く確信が持てない(1)の6段階で評定してください,を用いた。

本調査項目に影響する要因で障害に関係した特定要因として次の3つを選んだ。なお等号の後の数値は各カテゴリーに含まれる人数である。

(1)接触経験:障害者との接触内容については Fichten et al. (1987) と河内 (1990a) のカテゴリーを参考に①家族接触(家族の中に障害を持つ者がいる,視覚障害者=34,聴覚障害者=37),②親戚接触(親戚の中に障害を持つ者がいる,視覚障害者=65,聴覚障害者=64),③友人接触(障害のある友人がいる,視覚障害者=120,聴覚障害者=60),④表面接触(街中で障害者と2・3度話したことがある,視覚障害者=76,聴覚障

害者=133),⑤ボランティア接触(障害者のボランティアをしたことがある,視覚障害者=1,聴覚障害者=1),⑥マスコミ接触(障害者のことはテレビや新聞等でしか知らない,視覚障害者=4,聴覚障害者=4)の6カテゴリーを設定した。しかし⑤か⑥に回答したのはいずれの障害も合わせて5名しかいなかったため,④~⑥を合わせ「他人接触」とした。なお不明は,視覚障害者=1,聴覚障害者=2である。

(2)専門知識:障害学に関する講義の受講経験については,調査対象のほとんどが1・2年生で,両障害について概論的な授業しか受けていないため,受講経験の有り(視覚障害者=92,聴覚障害者=91)無し(視覚障害者=209,聴覚障害者=210)だけを問題にした。

(3)関心度:障害者にどのような関心があるかを認めることが,障害者と交流することに対する自己効力にどう影響するかを検討するため,1項目評定法(「あなたは,障害者に対しどのくらい関心を持っていますか。」)を用いた。関心の内容は「非常に関心を持っている(1)」から「全く関心がない(6)」の6段階である。しかし両障害とも「関心がない」方のカテゴリーは(5)と(6)の段階の者が合わせて3名しかいなかったため,それらを全て(4)の段階に組み入れた。その結果,各カテゴリーの人数は,「非常にある」:視覚障害者=35,聴覚障害者=38,「かなりある」:視覚障害者=93,聴覚障害者=97,「少しある」:視覚障害者=142,聴覚障害者=137,「あまりない」:視覚障害者=31,聴覚障害者=29であった。

次に,調査項目と関連する一般的要因として,10項目からなる「自尊心尺度」(Rosenberg, 1965)を選んだ。使用に当たっては,末永(1987)の翻訳版を用い,算出された1~7の尺度得点を「低(1, 2=102)」,「中(3, 4=114)」,「高(5~7=82)」に三分割した。不明は,3名であった。

結 果

本研究では欠損値と外れ値の処理をしたため,分析ごとに標本数が異なっている。

1. 自己効力の認知構造

感覚障害学生との交流に対する健全学生の自己効力の認知構造を検討するため,主因子法による因子分析を障害別に行った。

(1)「心地よさ」の評定における因子分析:まず固有値が1以上の因子が,視覚障害学生を交流対象とした項目(以下視覚障害者版とする)では2個,聴覚障害学生を交流対象とした項目(以下聴覚障害者版とする)では3個抽

TABLE 1 「心地よさ」「確信度」の評定による視覚障害者版および聴覚障害者版での因子分析結果

項目内容	視覚障害者版			聴覚障害者版		
	F1	F2	F0	F1	F2	F0
(C)とレストランで食事をする場合	.773	.022	.684	.769	.139	.695
講義が始まる前に(C)から一緒に教室へ行こうと誘われた場合	.760	.029	.611	.749	.075	.723
(C)に引き合わされた場合	.728	.089	.655	.709	.047	.742
喫茶店でコーヒーと一緒に飲まないかと(C)を誘う場合	.709	.042	.685	.815	.041	.755
学内での会合に同行してほしいと(C)から頼まれた場合	.670	-.035	.668	.691	.066	.771
学生寮でのパーティに(C)を誘う場合	.665	.115	.655	.691	.085	.737
(C)を交えてクラスの話を話す場合	.644	.157	.696	.549	.181	.772
図書館まで行って(C)にはできない調べ物をしてくれと頼まれた場合	.641	-.034	.633	.695	-.021	.754
手紙の代筆をしてくれるようにと(B)から頼まれた場合	.618	.012	.704			
代りに電話をかけてくれるように(D)から頼まれた場合				.637	.073	.734
(C)に話しかけようとする場合	.560	.075	.625	.574	.127	.761
先月貸した1000円を(C)に催促する場合	.026	.639	.718	.074	.700	.689
自分が必要なので授業のノート(C)に貸すのを断る場合	-.013	.570	.703	-.044	.607	.771
図書館で(B)がうるさくして迷惑なので静かにするよう注意する場合	.086	.528	.703			
(D)にゼミでの討論に加わるようすすめる場合				.396	.378	.671
(C)との見解が完全に対立した場合	-.029	.490	.678	.071	.615	.736
(C)があなたの机にジュースをこぼしたので一言いう場合	.058	.490	.738	.166	.621	.765
2人でする共同課題の内容を公平に分担しようと(C)に話す場合	.322	.472	.664	.310	.494	.721
(C)に1000円貸してくれるよう頼む場合	.056	.460	.717	.098	.546	.743
忙しいため(C)の手伝いを断る場合	-.110	.453	.642	-.072	.709	.770
レストランへはどう行けば良いかを(C)と話し合う場合	.358	.425	.709	.613	.320	.796
(B)の前で「見る」などの言葉を使う場合	.162	.373	.604			
(D)の前で「聞く」などの言葉を使う場合				.205	.490	.751
(C)が自分でできると思われるので手伝いを断る場合	.138	.317	.663	.147	.570	.796
(C)に頼み事をする場合	.498	.263	.691	.330	.552	.800
先週手伝いはいらないとされた(C)から手伝いを頼まれた場合	.478	.075	.714	.519	.121	.775
自分が必要な時にノートを貸してほしいと(C)に頼まれた場合	.423	-.061	.644	.392	-.017	.735
(B)と映画・テレビ番組について話をする場合	.381	.226	.584			
(D)とコンサート・ラジオ番組について話をする場合				.284	.268	.697
(C)は何を注文したいのかとウエイトレスからたずねられた場合	.263	.284	.703	.334	.266	.763
因子負荷量の2乗和	5.79	2.82	11.81	7.27	3.03	14.54
標本数		287	283	291	290	

(B)：あなたがあまりよく知らない同性の大学生で、「目が全く見えない相手」、(D)：あなたがあまりよく知らない同性の大学生で「耳が聞こえずコミュニケーションのとりにくい相手」、(C)：(B)と(D)の両方の相手

F1：「心地よさ」の評定における第I因子，F2：「心地よさ」の評定における第II因子，F0：「確信度」の評定における第I因子

出された。そこで障害別に因子数を1～3まで探索的に変化させてバリマックス回転を行った。その結果、両障害とも最も解釈し易かった2因子解を採用した。視覚障害者版についてバリマックス回転後因子負荷量の高い項目を解釈したところ (TABLE 1), 第I因子は、「レストランで食事をする・講義が始まる前に一緒に教室へ行こうと誘われた・引き合わされた・喫茶店でコーヒーと一緒に飲まないかと誘う」など障害のある学生とない学生とが気軽につき合える場面を表わす項目か

ら成り「交友関係」と命名した。第II因子は「先月貸した1000円を催促・自分が必要なので授業のノートを貸すのを断る・図書館でうるさくして迷惑なので静かにするよう注意する・見解が完全に対立した」など相手の気を悪くさせるようなことでも、自分の考えをはっきり主張する場面を表わす項目から成り、「自己主張」と命名した。一方 TABLE 1 から分かるように、聴覚障害者版の2因子についても、その因子構造は視覚障害者版の因子構造と非常に類似しているため、同様

の因子名を付けた。

次に、各因子について因子負荷量の高い10項目を選び、その総得点（視覚障害者版：「交友関係」 $M=42.56$, $SD=6.81$, 「自己主張」 $M=29.93$, $SD=5.63$ ；聴覚障害者版：「交友関係」 $M=41.72$, $SD=7.21$, 「自己主張」 $M=31.00$, $SD=6.22$ ）の差を、障害種別×因子の2要因分散分析によって比較した。その結果、因子の要因の主効果、($F[1, 1180]=957.11$, $p<.01$)と、交互作用 ($F[1, 1180]=6.60$, $p<.05$) に有意差がみられた。そこでtテストにより下位検定を行ったところ、因子の要因では、視覚障害者版 ($t[290]=27.46$, $p<.01$) および聴覚障害者版 ($t[292]=22.75$, $p<.01$) とも「交友関係」因子の方が有意に得点が高かった。障害種別の要因では、「交友関係」因子で、視覚障害者版が ($t[288]=3.48$, $p<.01$)、自己主張」因子で聴覚障害者版が ($t[292]=4.64$, $p<.01$) 有意に得点が高かった。Cronbachの α 係数によって各10項目の内部一貫性をみると、.761～.895、平均.849でほぼ満足できる値と言える。

(2)「確信度」の評定における因子分析：ここでは固有値が1以上の因子が、両障害とも2個ずつ抽出された。いずれの場合も第I因子の固有値が第II因子以下の固有値に比べ、非常に高かった。第I因子から順に固有値の変化を示すと、視覚障害者版では11.81, 1.88, 0.82, 0.56, 聴覚障害者版では14.54, 1.21, 0.74, 0.54となった。また各項目の因子負荷量(TABLE 1)は、視覚障害者版では.584～.738で、平均.673であり、聴覚障害者版では.671～.800で、平均.747であった。第I因子の固有値が非常に高く、ほとんど全ての因子負荷量が.60以上と高いことから、「確信度」の評定では両障害とも自己の評定に確信が持てるか否かの1次元の構造をしていることが明らかとなった。このため、この因子を「確信評定」と命名した。

次に、各障害者版で因子負荷量の高い20項目の総得点（視覚障害者版： $M=87.23$, $SD=15.79$ ；聴覚障害者版： $M=87.83$, $SD=16.49$ ）の差をtテストにより障害間で比較したが、有意差は見られなかった。なお、各障害者版の α 係数の値は、それぞれ.943および.962であった。

2. 自己効力因子の障害相互の関係

障害別に得られた自己効力因子相互の関連を検討するため、まず障害別に因子得点に基づく3因子間相関行列を求めたところ、両障害とも「交友関係」因子と「確信評定」因子との間に統計的に有意な.20代の相関が得られたため、聴覚障害者版の3因子を説明変数に、視覚障害者版の3因子を基準変数として正準相関分析を行った。TABLE 2にある各因子の構造係数を見ると、両障害とも成分Iでは「確信評定」因子が、成分

TABLE 2 正準相関分析による構造行列と正準相関係数の検定

因子名	成分 I	成分 II	成分 III
聴覚障害者版 DF			
「交友関係」	.434	.890	-.140
「自己主張」	-.297	.187	.936
「確信評定」	.947	-.192	.259
冗長性係数	.261	.159	.134
冗長性係数の和：Re(DF/BL) = .55			
視覚障害者版 BL			
「交友関係」	.470	.878	-.090
「自己主張」	-.294	.121	.948
「確信評定」	.931	-.138	.337
冗長性係数	.262	.148	.141
冗長性係数の和：Re(BL/DF) = .55			
正準相関係数	.817	.744	.645

IIでは「交友関係」因子が、成分IIIでは「自己主張」因子が絶対値で.87以上と際立った値を示した。関連性の程度を検討するため、冗長性係数を求めたところ、TABLE 2にあるように、一方の自己効力因子群によって説明できる他方の自己効力因子群の分散は、いずれの場合も全体で55%とほぼ半分しかなく、内容的には両障害とも非常に類似した因子群でありながら、測定内容にはかなり独自性のあることが示唆された。なお、正準相関係数の値は全て0.1%水準で統計的に有意であり、一般化決定係数は.546であった。

3. 自己効力因子と関連する要因

結果の1で抽出された各因子の因子得点を基に、性別、接触経験、受講経験、関心度、自尊心の5つの個人的要因(15カテゴリー)との多次元の関連を考察するため、数量化理論I類を適用した。各要因の規定力は、TABLE 3にある偏相関係数の値(.15以上)により評価した。その結果、視覚障害者版の3因子全てに関連がある要因は接触経験だけであった。関心度と自尊心は「交友関係」因子と「確信評定」因子と、また性別は「交友関係」因子と「自己主張」因子と関連があったが、受講経験は「自己主張」因子だけにしか関連が見られず、要因の影響は因子によって異なることが示された。一方、聴覚障害者版の3因子全てに関連があったのは、関心度だけであった。しかし、関連の強さの順位を見ると、全てが関心度、自尊心、接触経験の順となっており、聴覚障害者版の場合は要因の影響の類似性が示された。

次に、カテゴリー数量の大きさと正負の符号に基づ

TABLE 3 6つの自己効力感因子得点に対する数量化I類の分析結果

要因 カテゴリー	視覚障害者版			聴覚障害者版		
	交友関係 (偏相関) 数量	自己主張 (偏相関) 数量	確信評定 (偏相関) 数量	交友関係 (偏相関) 数量	自己主張 (偏相関) 数量	確信評定 (偏相関) 数量
性別	(.215)	(.168)	(.067)	(.132)	(.047)	(.100)
女子	.108	-.072	.039	.061	-.022	.055
男子	-.184	.139	-.065	-.105	.039	-.093
接触経験	(.190)	(.222)	(.242)	(.238)	(.116)	(.204)
家族	.237	.097	.530	.211	-.171	.354
親戚	-.063	-.115	-.133	-.260	.085	-.026
友人	.068	-.097	-.036	.106	.026	.061
他人	-.158	.202	-.043	.010	-.007	-.112
受講経験	(.045)	(.184)	(.012)	(.210)	(.031)	(.013)
あり	-.043	.165	-.014	.199	-.029	-.014
なし	.019	-.076	.006	-.082	.012	.006
関心度	(.479)	(.125)	(.218)	(.591)	(.278)	(.305)
非常にある	.751	.001	.371	1.059	.123	.398
かなりある	.246	-.107	-.035	.149	-.222	-.002
少しある	-.212	.060	-.118	-.227	.163	-.193
あまりない	-.486	.047	.200	-.608	-.152	.400
自尊心	(.157)	(.071)	(.242)	(.257)	(.126)	(.265)
高得点	.150	.028	.141	.205	.096	.268
中得点	-.015	.032	.136	.009	.024	-.004
低得点	-.107	-.057	-.247	-.197	-.100	-.223
重相関係数	.592	.334	.396	.678	.321	.454

いて要因内の特徴を見ると、性別内では両障害とも「交友関係」因子と「確信評定」因子で女子が因子得点を高める（プラス）方向に寄与したが、「自己主張」因子では男子がプラスとなり、逆の傾向を示した。接触経験内では両障害とも「交友関係」因子と「確信評定」因子で家族がプラス方向に、親戚と他人がマイナス方向に寄与し、自己効力と接触の密接度とは関連のあることが示された。しかし「自己主張」因子では視覚障害者版で他人がプラス、聴覚障害者版で家族がマイナスと前2因子とは逆の関係を示した。受講経験内では、関連の高い因子（すなわち、視覚障害者版の「自己主張」と聴覚障害者版の「交友関係」）で受講経験「あり」がプラス、「なし」がマイナスの方向に寄与し、因子によっては特定の専門知識に効果のあることが示された。関心度内では、「交友関係」因子が両障害とも関心が高くなるにつれ、プラス傾向が高く、関心の程度が自己効力の強さと関連することが示された。しかし「確信評定」因子では、「あまりない」がプラスの高い値を示し、「自

己主張」因子では符号に整合性がないなど、関心度の影響はほとんど見られなかった。自尊心内ではどの因子も、自尊心が高くなるにつれほぼ数量が大きくなり、この要因の重要性が示唆された。

考 察

1. 自己効力の認知構造について

本研究では感覚障害である視覚障害あるいは聴覚障害の学生と交流することに対し健常学生が認知する2種類（「心地よさ」と「確信度」）の自己効力に関する因子構造を探究した。

その結果、「確信度」の評定は両障害者版ともその因子構造は1次元であり、確信度の評定は課題遂行に確信が持てるか否かの強さを表わす量的なものと解釈された。つまり Bandura (1977) の言う自己効力の「強度」に相当すると言える。因子負荷量の高い20項目の平均総得点をみると、両障害とも中央値の70よりもかなり高い87点以上を示しており、健常学生の自己効力の強度は高いことが推測される。この原因の1つは、障害者問題になんらかの関心を持つ学生を対象としたため、交流に対する意識がある程度明確であったことが考えられる。しかし「確信評定」因子では関心があると認める3カテゴリーと確信度とは整合性があるものの、関心がないカテゴリーでも確信度は高く、今後この点の検討が必要である。

一方、「心地よさ」の評定は両障害とも「交友関係」と「自己主張」という2因子からなる2次元構造をしていた。これは障害者との交流場面で課題を心地よく遂行できるか否かという自己効力の認知構造は、CISEQ 尺度 (Fichten et al., 1987) で仮定されているような一次元的なものではなく、交流場面の内容によって少なくとも2つの次元に分かれることが示された。このうち「交友関係」因子を代表する10項目の総得点平均値は42前後で中央値35よりかなり高く、表面的な交流は心地良く遂行できるのに対し、「自己主張」因子を代表する10項目の総得点平均値は30前後と中央値の35よりかなり低く、本音を漏らすようなつき合いには強い抵抗を感じることを示された。しかしこれらの相異は、2因子の独立性が高いことから、「確信度」の評定のような量的なものというよりは、むしろ質的な差異があると解釈される。つまり、「交友関係」因子のような表面的・建前的な関係だけでつき合える場合と、「自己主張」因子のように本音を漏らさなければつき合えない場合とは単なる抵抗感の強度の違いではなく、大学生においては両方の行為が本質的に異なっているこ

とを示唆している。また前者の行為の抵抗感と確信度とはやや関係があるのに対し、後者の行為の抵抗感と確信度とは関係がなく、この点でも両因子には質的な差異のあることが推測される。この原因の1つは、現代の青年が互いに傷つけたり傷つくことを非常に恐れて形だけの円滑な関係、すなわち「建前関係」を求め、「本音」を吐くような対人関係を避ける傾向が強くなる(千石, 1991)、両者の間に大きな隔たりがあるためと考えられる。これら2因子と障害種別との関連では、視覚障害学生の方が「交友関係」因子でつき合いやすいことが示された。これは視覚障害者が日常生活では他の身体障害者(例えば、車椅子使用者)より受け入れやすいという結果(Stovall & Sedlacek, 1983)と一致している。これに対し、「自己主張」因子では聴覚障害学生に対する方が自己主張しやすいことが示された。これは視覚障害が重度なものと見られ、視覚障害学生が問題を起こしても大目に見てもらえる可能性があるのに対し、聴覚障害学生の場合は障害の様子が健常学生にはよくわからず、視覚障害者ほど大目に見てもらえないためと推察される。

2. 障害種別相互の関連について

「心地よさ」と「確信度」の評定において抽出された因子は、障害間で内容的に非常に類似していた。これは類似した態度項目を使用した場合には、障害種別が異なっても、類似した態度構造が得られたという結果(Siller, Ferguson, Vann & Holland, 1967)と一致している。また正準相関分析による構造係数の値を見ても、対応因子の関連性が極めて強く、一般的傾向を検討するだけならば、障害者一般を対象とした尺度構成も可能であろう。しかし、「心地よさ」の評定における2因子には障害種別間で有意差が見られるとともに、冗長性係数の値を見ても、一方の障害者版による自己効力因子群で説明できる他方の障害者版による自己効力因子群の分散は全体で約55%と低かった。したがって、当該分野の自己効力尺度を作成する場合には、障害者一般を対象とすることは避けるべきであろう。

3. 自己効力因子と関連する要因について

本研究では感覚障害学生との交流に対する健常学生の自己効力を増加させる要因として性別、接触経験、受講経験、関心度、自尊心の5要因を取り上げた。このうち関連が最も強かったのは、両障害とも「交友関係」因子での関心度の要因であった。つまり、障害者との友好的な関係を作るためには、まず障害者への関心を持つことが必要であろう。しかし他の因子ではこのような関連は見られず、特に自己主張するような場面

では障害者に関心を持つだけでは本音で物を言うつき合いはできないことが明らかとなった。次いで自己効力を高める要因として両障害に共通しているのが接触経験の要因である。「交友関係」の因子では接触経験のある者でも、自己効力への寄与は、家族と友人がプラス、親戚がマイナスと逆方向を示し、身体障害者に対する態度研究(Cloerkes, 1979; 河内, 1990a)と一致する結果を得た。親戚の場合は、Cloerkes (1979)などが指摘するように、家族ほどには受容する必要性はないものの、友人のように関係を意図的に回避することもできず、窮屈な関係が障害者への抵抗感を高めたと考えられる。しかし「自己主張」因子では、視覚障害者版で他人がプラスに寄与し、聴覚障害者版で家族がマイナスに寄与するなど「交友関係」因子とは逆の関係を示した。これは親しい者には相手の気を悪くするようなことは言い難く、他人の方が言い易いという実感を裏付けているとも言える。次に、自己効力と関連のあるのが自尊心の要因であった。これはどの因子でも自尊心得点が高くなると、自己効力得点も高くなる傾向が見られ、障害者に対する態度研究の結果(Fichten et al., 1987; Garske & Thomas, 1990)とも一致しており、項目内容の妥当性を示唆するものと理解される。一方視覚障害者版でしか関連の見られないのが性別の要因である。女子が「交友関係」因子で、男子が「自己主張」因子でプラス方向に寄与し、正反対の反応を示した。これは女子の方が誰とでも仲良くしたいのに対し、男子は女子よりも自立したつき合い方をしたいとする友達つき合いの男女差(落合・佐藤, 1996)によるためと考えられる。しかしこのような性差は大学生になると見られなくなるとしており、今後キャンパス内での交流対象を健常学生にも広げた研究が必要であろう。また受講経験の要因も、視覚障害者版では「交友関係」因子と、聴覚障害者版では「自己主張」因子と関連が見られ、異なる障害種別の影響が示された。この影響が、障害種別それ自体によるものなのか、授業内容によるものなのかは定かではなく、この点についてのより詳細な研究が今後必要であろう。

引用文献

- Bandura, A. 1977 Self-efficacy: Toward a unifying theory of behavioral change. *Psychological Review*, 84, 191—215.
- Cloerkes, G. 1979 Einstellung und Verhalten gegeneber Koerper-behinderten: Eine Bestandsaufnahme der Ergebnisse inter-nationaler

- Forschung. Berlin : Marhold.
- Cloerkes, G. 1981 Are prejudices against disabled persons determined by personality characteristics ? *International Journal of Rehabilitation Research*, **4**, 35—46.
- Curran, J., & Wessberg, H. 1981 Assessment of social inadequacy. In D. Barlow (Ed.), *Behavioral assessment of adult disorders*. New York : Guilford, Pp. 405—438.
- Eisler, R.M., Hersen, M., Miller, P.M., & Blanchard, E.B. 1975 Situational determinants of assertive behaviors. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, **43**, 330—340.
- Fichten, C.S. 1986 Self, other, and situation-referent automatic thoughts : Interaction between people who have a physical disability and those who do not. *Cognitive Therapy and Research*, **10**, 571—587.
- Fichten, C.S., & Bourdon, C.V. 1986 Social skill deficit or response inhibition : Interaction between disabled and non-disabled college students. *Journal of College Student Personnel*, **27**, 326—333.
- Fichten, C.S., Bourdon, C.V., Amsel, R., & Fox, L. 1987 Validation of the College Interaction Self-Efficacy Questionnaire : Student with and without disabilities. *Journal of College Student Personnel*, **28**, 449—458.
- Fichten, C.S., Robillard, K., Tagalakakis, V., & Amsel, R. 1991 Casual interaction between college students with various disabilities and their nondisabled peers : The internal dialogue. *Rehabilitation Psychology*, **36**, 3—20.
- Gannon, P.M., & MacLean, D. 1995 Australian university students' attitudes towards disability: The first step to integrating students with a disability at university. *Australian Disability Review*, **1**, 63—71.
- Gannon, P.M., & MacLean, D. 1996 Attitudes toward disability and beliefs regarding support for a university student with quadriplegia. *International Journal of Rehabilitation Research*, **19**, 163—169.
- Garske, G.G., & Thomas, K.R. 1990 The relationship of self-esteem and contact to attitudes of students in rehabilitation counseling toward persons with disabilities. *Rehabilitation Counseling Bulletin*, **34**, 67—71.
- Gething, L., & Wheeler, B. 1992 The Interaction with Disabled Persons Scale : New Australian instrument to measure attitudes towards people with disabilities. *Australian Journal of Psychology*, **44**(2), 75—82.
- Kang, Y.W., & Masoodi, B.A. 1977 Attitudes toward blind people among theological and education students. *Journal of Visual Impairment and Blindness*, **71**, 394—400.
- 河内清彦 1990a 学生および教師の視覚障害者観 文化書房博文社
- 河内清彦 1990b 肢体不自由者(児)に対する大学生の態度構造とその形成要因としての専攻学科および性別の役割について 特殊教育学研究, **28**, 25—35.
- 河内清彦 1994 視覚に障害のある人々を取り巻く現代の社会・心理的環境 谷村裕教授退官記念論文集刊行会(編) 視覚障害に学ぶ 谷村裕教授退官記念論文集, Pp. 65—73.
- 落合良行・佐藤有耕 1996 青年期における友達とのつき合い方の発達的变化 教育心理学研究, **44**, 55—65.
- Penn, J.R., & Dudley, D.H. 1980 The handicapped student : Problems and perceptions. *Journal of College Student Personnel*, **21**, 354—357.
- Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton, N.J. : Princeton University Press.
- 坂野雄二・東條光彦 1993 セルフ・エフィカシー尺度 上里一郎(監修) 心理アセスメントハンドブック 西村書店 Pp. 478—489.
- 千石 保 1991 「まじめ」の崩壊:平成日本の若者たち サイマル出版会
- 障害学生問題研究会(編) 1990 総合大学における障害学生のあり方の基礎研究 多賀出版
- Siller, J., Ferguson, L.T., Vann, D.H., & Holland B. 1967 Structure of attitude toward the physically disabled : Disability Factor Scales—amputation, blindness, cosmetic conditions. New York : New York University School of Education.
- Stovall, C., & Sedlacek, W.E. 1983 Attitudes of

male and female university students toward students with different physical disabilities. *Journal of College Student Personnel*, **24**, 325—330.

末永俊郎(編) 1987 社会心理学研究入門 東京大学出版会

わかこま自立生活情報室(編) 1995 大学案内96年度障害者版 身体障害者団体定期刊行物協会

Whiteman, M.W., & Lukoff, I.F. 1965 Attitudes toward blindness and other physical handicaps. *Journal of Social Psychology*, **66**, 135—145.

Yuker, H.E., & Block, J.R. 1986 Research with the Attitudes Towards Disabled Persons Scales (ATDP). Hempstead, N.Y. : Hofstra University.

(1997.4.25 受稿, 11.15 受理)